

## 【漢方医学の四診（望、聞、問、切） 望診】

漢方的診断は、望、聞、問、切の四診を用い、総合的に判断して「証（しょう）」を決めます。

望診は視覚によって観察するわけで、西洋医学の INSPECTION に相当しますが「望ンデ之ヲ知ルヲ神トイフ」とありますように、観察力の鋭さが医術には大切であると考えられています。また「病、内ニ在レバ、応、外ニ表ル」といわれるように、体表の観察から患者さんの病状を理解します。

望診は、神、色、形、態に分けて考えます。神は、精神、神気、神志などを意味し、色調と形態を含んだ総合的な印象です。中国の古典である黄帝内経（こうていだいけい）・靈枢（れいすう）に「神気ヲ失フモノハ死シ、神気ヲ得ルモノハ生キル」と書かれています。血液検査のデータが少々悪くても、神気があれば予後は良好と考えてよいでしょう。しかし神気が虚している状態では、次第に病状は悪化してゆくわけです。

色は色調（血色）、光沢、栄養状態などの観察で、漢方の代表的な病理観である於血（おけつ）症とか虚寒証を判断します。

形と態は、「かたち」と「働き」という意味で相互関係にあります。患者さんと向き合った時、私の方をしっかりとみつめ、からだの動きがよい状態であれば治り易いと考えます。しかし大儀そうで何となく動きが悪く、うずくまるような感じで壁の方に向かって臥し、人をみることも億劫がっているようでは、治療に難渋することを覚悟します。西洋医学においても、歴史的にチフス様顔貌、テクヌス顔貌、ヒボクラテス顔貌といわれるようにくわしい観察があり、これらの所見は今でもある程度参考になります。

しかし漢方では視（目を止めてみつめる）診といわずに望（つま立ちをして遠くを望む）診としている意味を考えておく必要があります。古く、「靈氣を望んでその妖祥（ようしょう）をみる」とか「望気によって敵情を察する」といわれますように、単に目で見えるものを視る、観察するだけでなく、目に見えないもの、つまり患者さんの背景にあるものを望視するというわけです。「医学はすべて観察にある」と述べたランネックの思想よりも深いものがあります。